

アストン『英訳日本紀』脚注抄訳稿（5）

虎尾 達哉

うみさち やまさち
海幸…山幸 (203)

[p163]

a sea-gift, a mountain-gift*

(203) 釣りの才能と狩猟の才能。

すなわちそのたちをもって いしきはりをかたして
即以其横刀、鍛作新鉤 (204)

[p165]

forthwith took his cross-sword and forged* from it new fish-hooks

(204) これは、この物語が流布するようになった頃には、剣と共に釣り針も、その素材は鉄であったことを示している。ギリシャ青銅器時代の釣り針は角製である。βοός κέρασ ἀγραύλοιο (牛の角の鉤)。

かどのまえにひとつのいあり いのほりにひとつのゆつつらのきあり
門 前 有 一 井、井 上 有 一 湯 津 杜 樹 (205)

Before the gate there was a well, and over the well there grew a many-branched cassia-tree*

(205) 前に大きな木のある城門とか底が鏡の役割をはたす井戸といったものは、古い世界の物語のいくつかに見られる、ごくありふれた小道具である。以下はラングの“*Custom and Myth*” 91頁から。「それから巨人の娘はニヒト・ノート・ナシングの住む宮殿にやって来た。そして、木に登って行き、そこから彼を探し見た。庭師の娘が井戸で水を汲もうとして、その影を目にとめた」など。

ここに そのねがいのまにまについにゆるす
於是、隨其所乞遂赦之、 (206)

[p167]

Thereupon he at length yielded his petition, and spared him*

(206) カインとアベル⁸⁵の時以来ずっと民間伝承では、何故か兄よりも弟の方が偏愛されてきた。神武の伝説にもその事例がいくつか含まれている。

とよたまひめみどかりにこうむとくにたつになりぬ
豊玉姫方産化為龍 (207)

Toyo-tama-hime was just in childbirth, and had changed into a dragon*

(207) 日本の書物（1746年版行）からとった挿絵では、海の王とその娘は龍と人間の身体を合せ持つものとして描かれている。

うみのみちをとしてただにいぬ
閑海途而径去矣 (208)

[p169]

Then she barred the sea-path, and passed away*

(208) 「いろいろな神秘的な法に反した結果として、新婦や新郎が失踪する例は数多くある」ラングの “*Custom and Myth*” 81頁。

ひこなぎさたけ う がやふきあえず のみこと
彦波瀲武鸕鷀草葺不合 (209) 尊

Hiko-nagisa-take-u-gaya-fuki-aezu* no Mikoto

(209) 皇子・浜・勇敢な・鶺鴒・イグサ・かや葺き・未完成。この名の後半部分に当てられたものについては、このあとに配された様々な神話のうちの一つに出てくる。チェンバレンの “*KO-JI-KI*” 27頁も見よ。

ひこのみちをひこなぎさたけうがやふきあえずのみことともうすゆえは そのうみへたのうぶやに またくうのはをもてかやにしてふけるに いらかおきあえぬときに
所以兒名称彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊者、以彼海浜産屋、全用鸕鷀羽為草葺之、而葺未合時、
みこすなわちあれませるをもつてのゆえに よりてなづけたてまつる
兒 即 生 焉 故、因 以 名 焉 (210)

[p173]

The child was called Hiko-nagisa-take-u-gaya-fuki-aezu no Mikoto, because the parturition-house by the sea-shore was all thatched with cormorants' feathers, and the child was born before the tiles had met.

It was for this reason that he received this name*

(210) 女性は出産の際、鶺鴒の羽を手にするによって苦痛を和らげることができたという迷信がある。コヤスガイが同様の目的で使われるのは、間違いなくその形状による。

ここをもって ほのすせりのみことの の ち もろもろのはやひとたち いまにいたるまでにすめらみことのみかきのもとをはなれずして よよにほゆるいぬしてつかえまつるものなり
是以、火酢芹命苗裔、諸隼人等、至今不離天皇宮墻之傍、代吠狗而奉事者矣 (211)

[p175]

On this account the various Hayato descended from Ho no susori no Mikoto to the present time do not leave the vicinity of the enclosure of the Imperial Palace, and render service instead of barking dogs*

(211) ハヤトは皇室の護衛隊を構成した。その名(ハヤ・ビト)の字義は隼・人である。彼らは薩摩および大隅地方の出身であった。ハヤトは天武朝および持統朝では繰り返し叙述されている⁸⁶が、それ以前においてはそうでもないと思う。

延喜式(延喜の時代901-923の細則集)によれば、一年の最初の日や、即位式の際、さらには外国使節を迎えた時に、20名の上席のハヤトと20名の新参の隼人、そして132名の通常のハヤトがその場に出席することになっていた。これらのハヤトたちは宮殿の門の外に左右に分かれて所定の位置に就くことになっていた。官僚たちが最初に入場したり、椅子から立ち上がった際には、新参のハヤトたちが3回吠声を上げ⁸⁷、また儀式の他の場面ではもっと多く吠えたり遠吠えしたりした。大きな声で吠えることもあれば、小さな声で吠えることもあった⁸⁸。

針⁽²¹²⁾

[p177]

needle*

(212) 日本語のハリには針と釣り針の両方の意味がある。(しかし) ここで使用されている漢字にはそのような両義性はない⁸⁹。

すなわちみちのかわ やえをしきて
乃 舗設海驢⁽²¹³⁾ 皮八重

He spread eight layers of sea-asses' *skins

(213) 行間の注にはミチとある。海の食肉目の一種を意味する。おそらくアザラシだろう。

おきつとり かづくしまにじ わがいわし いもはわすらじ よのことことも
飢企都鄧利、軻茂豆勾志磨爾、和我謂禰志、伊茂播和素邏珥、譽能抛鄧馭鄧母⁽²¹⁴⁾ [p181]

(沖つ鳥 鴨著く嶋に 我が率寝し 妹は忘れじ 世の尽も)

Whatever befalls me,

Ne'er shall I forget my love

With whom I slept

In the island of wild-ducks -

The birds of the offspring*

(214) 原本の行は上記とちょうど逆順。韻律にのっとりた正則のタンカである。

“my love”を表す語はイモである。これは古代日本語では、妻と妹とのどちらに対しても、偏りなく用いられる。

ちおも ゆおも およびいかみ ゆえびと
乳母、湯母、及飯嚼、湯坐⁽²¹⁵⁾

wet-nurses, bathing-women, boiled-rice-chewers, and washerwomen*

(215) 明らかに、語り手は、ここでは当時の皇室保育職員のことを述べている。

あかだまの ひかりはありと ひとはいえど きみがよそいし とうとくありけり
阿軻娜磨迺、比訶利播阿利登、比鄧播伊珮耐、企弭我譽贈比志、多輔妬勾阿利計利⁽²¹⁶⁾

(赤玉の 光はありと 人は言へど 君は装し 貴くありけり)

Some may boast

Of the splendour

Of red jewels,

But those worn by my Lord -

It is they which are admirable*

(216) 古事記はこの詩の異作を載せている⁹⁰。チェンバレンの“KO-JI-KI” 128頁参照。

あげうた
挙歌 (217)

age-uta*

(217) アゲルとは高めること、したがって賞賛すること、それ故、アゲ・ウタとは賞賛の詩を表すものかもしれない。

うちのどこにはまごおふすまのうえに うちあぐみにいる
於内床則寛坐 (218) 於真床覆衾之上

[p183]

at the inner one he sat down at his ease* upon the cushion covering the true couch

(218) すなわち、足を組んで座ること。これは通常の座る姿勢に比べると敬意が薄い。

はじめおあしにつくときには あしうらをす
初潮漬足時、則為足占 (219)

[p185]

First of all, when the tide reached his feet, he did the foot-divination*

(219) すなわち、この種の占いを行うときのように、足をもももぞ動かした。

かむやまといはれびこのすめらみこと
神日本磐余彦天皇 (220)

[p189]

THE EMPEROR KAMI-YAMATO IHARE-BIKO*

(220) Emperor は漢字の天皇とはほぼ同義だが、両者ともに外国語である。行間の日本語の注ではスメラミコト、すなわち「至上の威厳」である。スメラは「全体を一つに束ねる」つまり「全体を支配する」の意のスベルと語源を同じくする。サトウの“*Ancient Japanese Rituals*” (TASJ vol VII, ii) 113頁を見よ。

イハレは大和地方の地名。ヒコは皇子を意味する。

神武(神聖なる武勇)は死後の名である。古い時代のミカドたちの名前は、日本紀が著された後の、桓武朝(782-806)になってから案出されたものである⁹¹。しかし、それらの名前は日本の著作者たちの間では一般に使用されているので、ここでもそれにしたがって叙述しなければならない。

以下の物語には、紀元前のある時期に人々が実際に九州から大和に東進した事実が恐らくは伝説化されて残っているのだが、それ以上踏み込むことは危険である。細部は明らかに架空である。神武天皇の言葉の中に置かれた中国典籍からの引用文言のように、中には架空であることを実証できるものもある。

かりに神武天皇による大和征服の物語が史実であるとすれば、神武が大和で遭遇した人々はどういう民族に属する人々だったのかといった疑問が生起する。敢えて言えば、大変古い中国の書物である山海経⁹²に、北倭とともに燕王国に服属していたと記されている南倭の人々であったかも知れない。古代の中国人たちはヤマトが九州の南に位置するという観念を持っていた。中国北部の王国である燕は紀元前1122年から同265年まで独立国として存在した。チェン

バレンの日本の古代の伝説は三つの異なった中心、出雲、大和、筑紫に結びつくと言及しているが、このことはこれらの場所が政治権力の中心であったことも何がしか示唆している。神武天皇によって征服された首長たちに付けられている名前は紛れもない日本語であり、彼らの居住地の地名もまた同様である。私はチェンバレンがヤマトやキヤシマなどをアイヌ語由来とすることには同意できない。明白な日本語で説明することが可能だからである。筑後には別のヤマトが存在するが、ここではアイヌ起源説は完全に見当違いである。しかしながら、私は日本の上記地方の地名に関するチェンバレンのアイヌ語起源説すべてに対して異を唱えようという気はないし、またここに移住した最初の日本人がアイヌの人々を追い払った可能性も十分あると思っている。

ひこなぎさたけ う がやふきあへずのみことのよはしらにあたりたまうみこ
彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊 第四子 (221)

He was the fourth child* of Hiko-nagisa-take-u-gaya-fuki-ahezu no Mikoto

(221) この物語が書かれた当時の日本では、長子身分は明らかに認められていなかった。

にしほとり
西偏 (222)

western border*

(222) すなわち、九州。

あまつみおやのあまくだりましてよりこのかた いまに
自天祖降跡以逮、于今一百七十九萬二千四百七十余歳 (223)

From the date when our Heavenly ancestor descended until now it is over 1,792,470 years*

(223) 古代中国君主の治世期間を膨大な年数であらわすことを真似ている。

あまつひつぎをひらきのべて
恢弘大業 (224)

the extension of the Heavenly task*

(224) すなわち、天皇の力をより一層発展させて、の意。

くにのもなか
六合之中心 (225)

the centre of the world*

(225) ここでの世界とは六つの場所、北、南、東、西、天頂、天底のことである。無論、これは中国的である。この神武の発話全体が実に中国的なのである。

ことし
是年也、太歳甲寅 (226)

[p191]

This was the year Kinoye Tora(51st) of the Great Year*

(226) 太歳とは中国の60年周期のことである。この時間を数える方式については、ジェームズ・レッジの“The Chinese Classics”、ジョン・チャルマーズ⁹³の“*Essay in prolegomena to Shooking*”、アーネスト・サトウの“*Japanese Chronological Tables*”、ウイリアム・メイヤーズの“The Chinese Reader’s Manual”などに記されている。この方式は紀元前においては中国ですら、年を記録するためには使用されていない。したがって、日本においては、紀元5世紀に字を書くことが導入されるようになるまでは、この方式が知られていたはずはない。付け加えるまでもないことであるが、日本紀のこの部分の日付けはまったく架空のものである。

かむなづきのひのとみのついたちかのとりのひ
十月丁巳朔辛酉 (227)

the Kanoto Tori day (the 5th) of the 10th month, the new moon of which was on the day Hinoto Mi*

(227) 日本紀では各月の日子は、全篇を通して、このような不器用な様式で表されている。それらを一々記すことは不要と思われるので、この一例のみを記すにとどめる。

はやすひなと
速吸之門 (228)

the Haya-suhi gate*

(228) 速く・吸う・門。豊後水道のこと。速い潮流からそう呼ばれる。

うさ
菟狭 (229)

Usa*

(229) ウサは現在は豊前地方の一地域（コホリ）である。

国造 (230)

Kuni-tsu-ko*

(230) クニノミヤツコとも。地域の世襲の豪族。

一柱 (231)

one pillar*

(231) チェンバレンの“*KO-JI-KI*” 130頁およびオニールの“The Night of the Gods” 参照。後者においては、あるアイルランドの伝説と奇妙に一致することが注意を惹く。すなわち、「Mailduin は航海をして Aenchoss と呼ばれる島にやってきた。Aenchoss とは一本足という意味だが、何故そう呼ばれるかといえ、その島は中央で一本の柱によって支えられていたからである」とある。古事記および日本書紀の注では「一本の柱」を「一本の足」としている。

吉備国 (232)

the land of Kibi*

(232) 現在の備前、備中、備後地方を含む。

なには
難波 (233)

Naniha*

(233) ナニハは現在では大阪を詩的に表す名称となっている。本文で言及されている潮流は間違いなく河口の砂州を流れる潮流のことで、そこは悪天候の際、小さな船にとってはもっとも危険な場所となる。

かふち
河内 (234) 国

Kafuchi*

(234) カワチと発音する。

うちづくに
中州 (235)

[p193]

the inner country*

(235) ヤマト。

ながすねひこ
長髓彦 (236)

Naga-sune-hiko*

(236) 長い脛皇子。ナガ・スネは地名である。

とへ
戸畔 (237)

[p195]

Tohe*

(237) トへとは首長を表す言葉であつたらしい。

熊野神邑 (238)

the village of Kami* in Kumano

(238) あるいは熊野神の村かもしれない。

やたのからす
頭八咫鳥 (238)

[p197]

the Yata-garasu*

(238) ヤタガラス。ここでは「8フィートの頭を持った鳥」の意の漢字が使用されている。し

かし、この場合漢字から離れて、その漢字で表そうとした和語の方に注意を向ける必要がある。それは古事記からも、また古くから振られたカナからも知られるように、疑いなくヤタガラスである。この鳥については、これまで本居や他の国学者たちによって多くのことが書かれている。しかし、敢えて言わせてもらえば、それらは全体的はずれだと思う。その意味を知る糸口は10世紀の漢和語彙集である「和名抄」から与えられる。これによれば、日本紀についてのより古い時代の諸注釈である「私記」を典拠に、陽鳥つまり太陽の鳥を日本語で表したものの、それはヤタガラスだというのである⁹⁴。陽鳥とは、三本足で赤い色をした鳥であり、中国の神話によれば、太陽に棲むという。もし、ヤタガラスがこれと同じものであるとすると、ヤタという名の意味は明確となる。それは八本の手、もしくはヤには古代日本では「多くの」とか「幾つか」のという意味もあったから、多くの手という意味であったのであり、よく知られた三本の足を持つ陽鳥の神話を不足なく正確に表したものだだったのである。最近、テリアン・ド・ラタープリ氏⁹⁵はその著“*Western Origin of Early Chinese Civilization*”において、「太陽に棲むとされる三足鳥を初めて示唆は紀元前314年の中国・楚の詩人屈原による「離騷」でなされている⁹⁶」と述べている。三本足の鳥は古い時代のパンフィリアやリュキア⁹⁷の錢貨に様々な形態で図案化された。ゴブレ・ダルヴィエラ伯爵⁹⁸はその興味深い業績“*La Migration des Symboles*”（1891年）222頁に、そのいくつかの模写を載せている。TASJ vol.22 22頁のヒノマルについての論文⁹⁹とチェンバレンの“*KO-JI-KI*” 136頁参照のこと。征服者や開拓者が目的地に達する際、超自然界の鳥や獣がその道案内をすることは、古代の物語を特徴づける話として馴染み深い。ラングの“*Custom and Myth*” IIの71を見よ。

基業 (239)

the hereditary institution*

(239) 統治権。

大伴 (240) 氏

Ohotomo*House

(240) オホトモは「大いなる仲間」を意味する。オホトモ一族は天皇の護衛隊であった。

おほくめ 大来目 (241)

Oho-kume*

(241) オホクメはチェンバレンが指摘するように、おそらくは単に大いなる武力という意味であろう。しかし、古事記や日本紀が書かれる頃には、この意味が忘れ去られ、人の名と考えられたのである。

うかちのむら
穿 邑 (242)

the village of Ukechi*

(242) ウガツは穴をあけるという意味である。したがって、この名は彼らが山々を貫いてこの地に達したからという理由で付けられたものである。すべてこの種の地名由来はきわめて架空の度合いが高い。

おおきにししをもうけて
大 設 牛 酒 (243)

a great feast of beef and sake*

(243) われわれはここから（これはおそらくそういう事例であっただろうと思い）、古代日本の人々は現代に暮らす子孫たちよりもたくさん動物の肉を食べて生きていたと、つい推測したくなるかもしれない。しかし、この記述には疑いの余地がかなりある。後漢書の一節を思い起こさせてくれるが、それ以上のものではないという疑いである。その一節とは光武帝に牛肉と酒が捧げられたことを記述する。光武帝の即位は紀元25年のことであった。

于儂能多伽機珥、辞藝和奈破蘆、和餓末菟夜、辞藝破佐夜羅孺、伊殊区波辞、区旒羅佐夜離、
固奈瀾餓、那居波佐麼、多智曾麼能、未迺那鷄句塢、居氣辞被恵禰、宇破奈利餓、那居波佐麼、
伊智佐介幾、未迺於朋鷄句塢、居氣儂被恵禰 (244) [p199]

(菟田の 高城に 鳴羅張る 我が待つや 鳴は障らず いすくはし 鷹等障り 前妻が 肴乞はさば
立稜麥の 実の無けくを 幾多聶ゑね 後妻が 肴乞はさば 斎賢木 実の多けくを 幾多聶ゑね)

In the high castle(tree)of Uda

I set a snare for woodcock,

And waited,

But no woodcock came to it;

A valiant whale came to it*

(244) この詩の一行目のキはおそらく木の意でもあり、城の意でもあろう。この詩の言葉はまるで兄ウケシ（兄猪）が言ったかのような言葉である。すなわち、彼は自分の仕掛けた罠に、予期していた無邪気な鳴ではなく、鯨（天皇）がかかっているのを見つけた、と。猪は今日、ヤマ・クヂラつまり山の鯨と呼ばれている。したがって、この箇所で言い表そうとしている動物はおそらく猪であろう¹⁰⁰。

率直に言って、私はこの詩の残りの部分については、得心の行く理解ができない。守部に従った¹⁰¹チェンバレンの解釈(チェンバレンの“KO-JI-KI” 140頁)は大変素晴らしいものではあるが、私には憶測が過ぎるように思われる。しかしながら、注意すべきは、この詩のその部分にはある示唆が含まれていることである。それはそれぞれ年長の妻（コナミ）と年少の妻（ウハナリ）を

意味する二つの言葉が用いられていることから、当時日本には一夫多妻の慣習があったということである。古事記には見える間投詞の反復句¹⁰²は日本紀では省略されている。

是謂来目^{くめ} (245) 歌

This is called a Kume* song

(245) この一節の中では、クメは疑いなく「兵士」を意味している。

手量^{たはかり} (246)

the measurement*

(246) おそらく手拍子を意味するものだろう。

吉野国櫛部^{くずら} (247)

the Kuzu* of Yoshino

(247) クズは地域の首長ら。彼らは応神朝でもまた叙述される。

阿太養鷓部^{あだのうかひら} (248)

U-kahi of Ata*

(248) ウ・カヒは鷓の飼育者の意。日本では鷓による漁が今でも行われている。

男坂^{をさか} (249)

Wo-zaka*

(249) 男の坂。メザカとヲザカという用語は、現在では同じ場所に登っていく二つの道や石段に当てられている。その場合、一方(女の坂)はもう一方より急ではない。

取天香山社^{あまのかぐやまのやしらの} (250) 中土^{なかのはに}

take earth within the shrine* of the Heavenly Mount Kagu

(250) 社とは、templum (ラテン語、神域) のように、地面上の神聖な小区画のことであったかもしれない。カグヤマは大和にある山。

以造天平瓮八十枚…并造巖瓮^{あまのひらか} (251) ^{いつへ}

make eighty Heavenly platters. Also make sacred jars*

(251) イヅベ。平皿は米を盛るため、甕は酒を入れるためであった。TASJ vol. VII 109頁のサトウの ‘Ancient Japanese Rituals’ を見よ。

Akagane*

(252) アカガネは赤い金属、つまり銅を意味するが、この文は疑わしい。旧事記は違う読み方をしている。¹⁰³

やそひらか あめのたくじりやそち いつへ
八十平瓮、天手扶八十枚…嚴瓮 (253)

eighty platters, eighty Heavenly small jars and sacred jars*

(253) 日本古代の陶器がどのようなものであるかを実感したい読者は、大英博物館を訪れてゴウランド・コレクション¹⁰⁴をじっくりご覧いただきたい。また東京上野の博物館にもコレクションがある。蜷川式胤の『観古図説』¹⁰⁵と題する書物には古代陶器の大変素晴らしい描画が掲載されている。この製品の一般的な和名はギョウギ・ヤキ（行基焼）である。ギョウギとは670年から749年まで生きた僧侶の名で、轆轤を発明した功績があるとされている。しかし、日本において、轆轤は彼の時代よりもはるか以前に、すでに間違いなく知られていた。まさに本文のここの一節がその事実を証し立ててくれる。私が small jars と訳した漢字（「手扶」）や古代の注釈の中で施された和語「タクジリ」はいずれもここでは「手作り」という意味であり、ここから陶器を手で作ることの方が例外的であったという結論に達するのである。実際、日本紀が対象とする時代の陶器で現在に伝わっているものは、そのほとんど全てが轆轤を使用して作られたものである。

たとえばみなのはごとくして かしりつくるところあり
譬如水沫、而有所呪著也 (254)

eighty platters, eighty Heavenly small jars and sacred jars*

(254) 水に浮かぶ泡は人生のはかなさを表すために好んで用いられる象徴である。

訳注

85 旧約聖書・創世記第4章に登場する兄弟。供物のことでヤハウェに無視されたカインは弟アベルを殺害し、エデンの東に追放される。

86 例えば、書紀天武11年7月甲午条、同持統元年5月乙酉条など。

87 延喜準人式1大儀条

凡元日即位及蕃客入朝等儀、官人二人、史生二人率大衣二人、番上準人二十人、今来準人二十人、白丁準人一百三十人、分陣応天門外之左右、(中略)、群官初入自胡床起、今来準人發吠声三節、(下略)

88 これは延喜準人式6習吠条に基づく叙述と思われるが、本条は儀式ではなく、吠声の練習についての細則である。

89 漢字の「針」には「釣り針」の意味はない。

90 古事記上巻に

阿加陀麻波 袁佐閑比迦礼杼 斯良多麻能 岐美何余曾比斯 多布斗久阿理祁理
(赤玉は 緒さへ光れド 白玉ノ 君が装し 貴くありけり)

上記は日本思想大系『古事記』(岩波書店 1982年)に拠る。

91 「神武」のような死後贈られる漢字二字の天皇名を漢風諡号というが、坂本太郎「列聖漢風諡号の撰進について」(『日本古代史の基礎的研究』下、東京大学出版会、1964年)により、今日では神武以下持統までと元明・元正の漢風諡号が撰進されたのは淳仁朝の天平宝字6年から8年(762~764)のことであり、撰進者は淡海三船であったとするのが定説である。

92 中国古代の地理書。著者不明。漢代には存在した。

93 John Chalmers 英国人。レッグ(1815-1897)より年少の宣教師。著書に“The Origin of the Chinese”がある。

94 箋注倭名類聚抄巻一天地部景宿類一は「陽鳥」について、「日本紀謂之頭八咫鳥、田氏私記云、夜太加良須」と記す。上記は京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成 倭名類聚抄』本文篇(臨川書店、1968年)による。

95 Albert Terrien deLacouprie (1845-1894) フランスの言語学者、東洋学者。

96 現行の「離騷」にはこれに該当する詩文は見当たらない。ただ、「離騷」とともに楚辞に収められた「天問」には「羿焉彈日、烏焉解羽」の一文があり、さらにこれについての王逸の注(楚辞章句)は「淮南言、堯時、十日並出、草木焦枯、堯令羿仰射十日、中九日、日中九鳥皆死、墮其羽翼」と淮南子を引く。それによれば、弓の名人羿が堯に命じられて十の日(太陽)を射て九つの日を打ち落とし、日に棲む鳥九羽が死んだという(この話は現行の淮南子には見えない)。テリアンの指摘は「離騷」ではなく、この「天問」ないしは楚辞章句に基づくものではなかろうか。

97 パンフィリアは小アジア南部、リュキアは同じく南西部をさす地方名でローマ帝国の属州。

98 Eugène Goblet d' Alviella (1846-1925) ベルギーの政治家、歴史学者。

99 “‘Hi no Maru’, or National Flag of Japan’ (1894).

100 日本古典文学大系『日本書紀』上(岩波書店、1967年)はクヂラを「鷹等」(百濟語で鷹はクチ)と解釈するが、日本思想大系『古事記』(岩波書店 1982年)はこれを「鯨」とした上で、アストンのように猪ではなく、文字通りの鯨と解し、「山では捕れるはずもない鯨がかかったと歌うところに面白さがある」としている。

101 守部とは橘守部(1781-1849)。国学者。伴信友、平田篤胤、香川景樹とともに天保の四大家と称せられる。「稜威道別」、「稜威言別」、「橘守部家集」などの著書がある。チェンバレンが従ったのは「稜威言別」巻二。

102 亜々 志夜胡 志夜 此者伊能碁布曾 阿々 志夜胡 志夜 此者嘲咲者也
(ええ しやご しや コはいノゴふソ ああ しやご コはあざわらふソ)

上記は日本思想大系『古事記』(岩波書店 1982年)に拠る。ただし、一部省略し、また表記を改めた。

103 先代旧事本紀巻六皇孫本紀では「赤鯛」に作る。旧事紀は鎌田純一『先代舊事本紀の研究』校本の部(吉川弘文館、1960年)に拠る。

104 ゴウランドとは William Gowland (1842-1922)。明治6年(1873)から明治9年(1876)まで大阪造幣局で御雇外国人として勤務した英国人冶金学者。その間、日本の120以上の古墳を発掘調査して、「日本考古学の父」と称される。その出土品のコレクションを A.W.Franks が1896年に購入し、大英博物館に寄贈した。

105 蛭川式胤(にながわ のりたね 天保6年-明治15年 1835-1882)は明治期の官吏。古社寺宝物の調査、博物館の開設に尽力し、日本の古美術を外国に紹介した功績も大。仏文解説のついた主著『観古図説』は陶芸の名著とされる。

本稿は平成22~24年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)「幕末・明治期の先駆的英国人日本学者による国学の受容と評価」による成果の一部である。